

デジタルハリウッド大学

2026 年度 一般選抜 A 方式

国語 [60 分]

【 注 意 事 項 】

1. 試験監督の指示があるまでは、問題冊子は開かないこと。
2. 試験監督から指示があったら、解答用紙に氏名・受験番号を正確に記入し、受験番号マーク欄にも受験番号を正確にマークすること。
3. 試験開始の合図後、この問題冊子を開き、40 ページ(白紙ページ含む)揃っているか確認すること。
4. 乱丁、落丁、印刷不鮮明などがある場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
5. 解答は、すべて別紙の解答用紙の解答欄にマークすること。
6. 試験開始から終了までの間は、試験教室から退出できません。
7. 不正行為を行った場合は、その時点で受験の中止と退室を指示され、同日受験したすべての科目の成績が原則無効となる。
8. 解答用紙は試験終了後、回収される。問題冊子は持ち帰っても良い。

これは2ページ目です。
次のページから問題が始まります。

第一問 次の小説の一節を読んで、後の設問に答えなさい。

二十歳の時、アラスカ西部の北極海に面した人口六百人ほどの小さな島、サウニケを初めて訪れた藤谷緑里は、そこで三歳下のリタや七歳下のシーラと友人になった。その後、緑里は毎年夏にアラスカを訪れ、五度目の今回はデナリ国立公園でテント泊をしようとしている。

「四年前に話したこと、覚えてる？」

「何の話？」

「有名になって、^(注1)サウニケの危機を世界に知らせるって夢」

「もちろん」

即答だった。それどころか、リタは「そのための道筋は決まってる」と付け加えた。緑里は身を乗り出す。

「どうやって？ 教えてよ」

リタはゆつくりと、山々の居並ぶ方角を指さした。つられて、緑里もシーラも^(注2)カナツクも視線を移す。人差し指の先には白き高峰デナリがそびえていた。

「あそこに登る」

しばし、緑里は胸のうちで発言を反芻^{はんすう}した。だが一向に真意は見えてこない。

デナリが北米最高峰であることは知っているし、厳しい山だということも想像がつく。だが、前人未到という訳でもないだろう。登っただけで有名になれるとは思えない。シーラやカナツクも[㊟]杌然^{もくぜん}としない表情だった。

「どうしてデナリに登ると有名になれるの」

①待っていた、とばかりにリタが不敵な笑みを浮かべる。

「冬のデナリに、女性で単独登頂した人はまだいない」

それからリタは、デナリ登頂の歴史を②滔々とたつとと語りはじめた。

人類初登頂は一九一三年の夏。アメリカ人の男性四名によって成し遂げられた。女性が初めて制したのはそれから三十年以上が経った一九四七年。その後もしばらくは夏季登頂のみが続いたが、一九六七年、初の冬季登頂に成功する。登頂メンバーには不在だったものの、日本人の西前四郎にしまえしろうがこの隊に参加していた。

夏季単独初登頂は、それから三年後の一九七〇年。達成したのは冒険家の植村直己うしむけなおみである。これによって、植村は世界初の五大陸最高峰登頂を成し遂げた。そして一九八四年。植村は冬季単独初登頂にも成功。しかし下山中行方不明となる。

以後、冬季単独登頂を成功させたのはすべて男性であった。

「冬のデナリは、世界でも指折りの難関なの」

穏やかな風に吹かれたリタが目細める。

「単独登頂に成功すれば、しかもそれを女がやり遂げれば、登山の歴史に名を刻める。私は一流の登山家として認められる」

リタの目は澄んでいた。一応の理屈は通っている。だが、緑里にはまだ理解できない点があった。

「でも、どうして登山なの。有名になるなら、他の方法でも……」

「駄目。時間がない」

ぴしやりと言い放つリタの語調は強い。カナツクは困惑の表情だったが、シーラは③ヘッドネットの内側で④涼しい顔（注3）をしている。

すでに話を聞いているのかもしれない。

「サウニケのすべてが水没するのはまだ先かもしれない。でも、島の浸食はもう進んでいる。怖いのは、島から人がいなくなることなの。わかる？　すでにサウニケから引つ越す住民は増えてる。あの町から少しずつ人が減っている。早く手を打たないと、私たちの故郷は無くなる」

シーラが小さく頷いた。^{うなず} リタは続ける。

「いろんな手段を考えた。環境団体の設立、土木技術の研究開発、政治への進出。けど、どれも時間がかかりすぎる。そうこうしているうちに、またサウニケから人がいなくなる。時間がないの。私は勉強もスポーツも、人一倍できるわけじゃない。他人よりちよつと優れていることがあるとすれば、体力くらい。できるだけ早く、世界に名を知らせるにはあそこに登るしかない」

視線で再度、デナリを示した。緑里は静かに首を振る。

「……無茶だよ」

あの寂しい町から人が消える前に何とかしたいという、リタの気持ちはわかる。だが、他に手段がないからといってデナリに登るというのは短絡的に過ぎる。

「登山ってそんなに簡単なものじゃないと思う」

「わかってる。私だって、明日デナリに登ろうってわけじゃない。まずは登山家になることから。でも、五年以内には登ってみせる」
緑里にも、リタの熱意は伝わった。彼女は本気だ。だが、まだ腑に落ちない部分もある。ただ登山家を目指すだけでなく、冬のデナリを狙うのはなぜか。

「アラスカで達成することが大事なの」

「補足するようにシーラが言った。」

「私たちはアラスカに生まれた^(注4) イヌピアットだから。アラスカで一番高い場所から、一番海に近い島の危機を伝える。そこまでやって初めて、みんなが振り向いてくれる」

シーラは十七歳という年齢にそぐわないほど落ち着いている。彼女が語ると、不思議と緑里の頭にもその意図がずっと入ってきた。

②要は、ストーリーなのだ。世間にサウニケへの関心を向けさせるために、リタはデナリというアラスカの象徴を選んだ。リタが冬季デナリへの単独登頂を果たせば、女性初という記録が残るだけではない。同じアラスカの出身者であり、しかもその島が沈みつつあるという、個人的な背景にも必ず光が当てられる。すでに、そのドラマ性まで狙っているのだ。

□。リタはちゃんと計算している。

「私もいずれ島を出て、手伝うつもり」

決定事項であるかのように、シーラが告げた。リタが小さく頷く。野望を掲げるリーダーと、それを支える参謀。二人の取り合わせはしっくりきた。

「おい。いつの間にそんなことになってたんだ？」

我に返った様子のカナツクは、眉尻を下げて問いかけた。シーラが冷たく答える。

「兄貴が島の生活から逃げてる間に」

「逃げたんじゃない。新天地を求めたんだよ」

「同じじゃない」

「とにかく。リタを手伝うとかいう話、父さんや母さんは知ってるのか」

「家出した人が何言ってるの？」

兄妹の小競り合いを横目で見ながら、リタは「緑里」と呼びかけた。

「あなたは、写真家になるんでしょう？」

③緑里はとつさに答えられなかった。

専門学校に入った十代の頃は、もちろんそのつもりだった。サウニケの写真集に衝撃を受け、写真家になることを決めたのだ。自然の魅力に溢れた写真集を出すのが夢だった。しかし、今では写真家という仕事の厳しさに直面している。

いわゆる作家の仕事で食べていける写真家は、ほんの一握り。しかも次の仕事がいづあるかわからない、綱渡りの状態であることが少なくない。

専門学校の卒業生たちは大半が作家ではなく、商業カメラマンになる。就職先は撮影スタジオ、写真館や結婚式場、新聞社や出版社などのマスコミ、先輩カメラマンの事務所など。いずれも依頼主の要望に応じたり、会社の指示に従って仕事するのが当たり前であり、個人的な作品作りに集中できる環境など用意されていない。

加えて、緑里は在学中に作家へのチャンスをつかむことができなかった。コンテストには熱心に応募したが、作品が入選することはなく、講師から高い評価を得ることもなかった。リタやシーラは励ましてくれたが、写真の才能がないことは自身が誰よりわかっている。

緑里は他の卒業生たちと同じように、広告撮影のスタジオにアシスタントとして入社した。仕事は忙しかった。機材の運搬や設置はもちろん、パソコン作業や外部へのお使いまで雑務は何でもやらされた。努力の甲斐あつて、一年半でチーフになった。

スタジオで働きながら、出入りするカメラマンたちと面識を得た。

なかでも相性がよかったのが、柏木雅治かしわぎ まさはるという静物専門のカメラマンだ。五十過ぎの無口な柏木は、白髪交じりの角刈りという風貌

も相まって、いかにも職人といった風情だった。一部のアシスタントからは怖がられていたが、緑里は平気だった。シーラと同じように、愛想はないが愛情がある人だとわかっていた。柏木とはよく当たり、じきにカメラの設定管理まで任された。

ある日、スタジオを訪れた柏木から唐突に声をかけられた。

——きみ、うちのアシに興味ない？

この一声がきっかけで、緑里は今年の春にスタジオを卒業して柏木の専属アシスタント、いわゆる直アシになった。

商業カメラマンとして、ここまでは悪くない経歴だと思う。同級生のなかにはいまだにチーフにならない者もいる。このまま柏木のもとで修業を積み、いずれ静物撮影の専門家になれるだろう。三十歳前に独立することも夢じゃない。

けれど。

現状が思い描いていた姿とかけ離れているのは、否めない。緑里がなりたかったのは商業カメラマンではなく、作家だ。このまま広告用の写真を撮り続けて、死んでいくのか。そのために写真をやってきたのか。

「青臭い^{（あおくさい）}想^{（おも）}いが蘇^{（よみがえ）}るたび、緑里は自分に言い聞かせる。私は作家になれない。学生時代、箸にも棒にもかからなかった。それが答えだ。

いつしか、緑里はプライベートでカメラを手にしなくなった。撮影は仕事であり、飯を食う手段だ。趣味の写真など一銭にもならない。

この旅にも一眼レフは持参しているが、まだ一度も取り出していなかった。

緑里は悩んだ末、「二応^{（フオア・ナウ）}ね」とリタに答えた。

「私、商業カメラマンになるの。作家になれなかったから」

無意識のうちに自嘲的な笑みが浮かんでいた。リタはびくりとも笑わず、コーヒーに口をつけてから言った。

「写真って、そんなに簡単なものじゃないと思うけど」

ついさっき、緑里がリタに放った言葉と同じだった。

「商業カメラマンにも矜持きやうじはあるし、見下すような言い方は緑里らしくない。芸術的な写真が撮りたいなら、やればいい」

リタの言うことは正論だった。そんなことはわかっている。けれどできないから苦しいのだ。緑里は苛立ちいらだを隠さなかった。

「④リタに何がわかるの」

「わからないけど、あなたの言うことは泣き言にしか聞こえない」

「作家じゃ食べていけないのは事実なの」

「だったら両方やればいいじゃない」

緑里は思わず苦笑いした。それこそ、カメラマンの仕事を舐なめている。商業の仕事をこなしながら、作家として作品の完成度を追求するなんて無理だ。時間も体力も許さない。両方半端になって行き詰まるのが落ちだ。

「何がおかしいの」

リタは笑わなかった。その真剣さに、緑里も顔に浮かんだ苦笑を消す。

「緑里は自由なんだよ。何をしたいがいいの」

「自由だよ、今も」

「そうは見えない。あなたは写真家を目指すべき。いい？ 私は世界的な登山家になる。緑里は一流の写真家になる。そして冬のデナリから下りたら、あなたに記念写真を撮ってもらおう。他の数多あまたの写真家を振って、真っ先に緑里にオファーする」

まるで実現することが決まっているかのような、確信的な口ぶりだった。緑里は下唇を噛かむ。リタの言葉に即答できない悔しさと、封

じ込めていた本音を見抜かれた恥ずかしさからだった。

「だから、絶対に写真家になって。約束して」

緑里が口にすべき答えは一つしかない。だが、恐怖が唇を固く閉じさせていた。作家を目指すことは、わざわざ自分から危険な場所に飛び込むのと同じだ。

母の顔が頭をよぎる。カメラを仕事にすることずっと反対していた真利子^{まりこ}だが、ここ最近は態度をやわらげていた。諦めもあるだろうが、仕事が安定してきたことが最大の理由だ。もしも作家を目指すと言い出せば、また親を心配させることになる。商業との両立が簡単でないことはわかりきっていた。

iii リタは強引で、同時に優しくかった。彼女は返事を急^せかさずじっと待った。

「私は……」

いつしか、シーラやカナツクも会話を止めて緑里に注目していた。静かな草原のただなかで、蚊の羽音だけが妙にうるさい。

瞼^{まぶた}を閉じると、これまで撮影してきた一葉一葉が網膜に映し出された。雪が降る故郷の町。サウニケの町と、住民たちの暮らし。夏のアラスカの雄大な山々や原野。そして大切な人たちのポートレート。

写真を撮る。その一事に惹^ひかれる理由が、おぼろげながら見えてきた。

緑里はいつも、ここではないどこかを求めている。iv 日常から断ち切られた桃源郷を夢見ている。そして、そんなものが地上に存在しないことも知っている。でも写真のなかには時折、存在しない世界が出現する。シャッターを切るたび、その奇跡が起こることを期待している。

商業の仕事では得られない、ギャンブルにも似た興奮。それを味わうために写真をはじめたのではなかったか。緑里は下唇を噛み、瞼

を開いた。

「⑤……私は、私が好きだと思える写真が撮りたい」

どうにか絞り出した一言だった。

作家になりたいとはまだ言えない。だが、空腹を満たすためではなく、心を動かすための手段として写真と向き合いたい。それくらいは言ってもいい、いや、そうしないと嘘だうそと思った。

「いいんじゃない」

リタは満足げに頷き、シーラは微笑した。カナツクは拍手を送る。

「ちゃんと聞いてなかったけど、ぼくは緑里が思うように生きればいいと思うよ」

「ありがとう。カナツクが言うと言得力があるね」

「だろう？」

草原に小さい笑いが起こった。v 明るい夜を、涼しい風が吹き渡る。野生の匂いが、緑里の鼻先をくすぐった。

（岩井圭也『完全なる白銀』より。出題の都合上、本文中に一部変更した箇所がある）

（注1）サウニケの危機——小説上の島「サウニケ」での、地球温暖化の影響で海岸線が削られているという環境問題。

（注2）カナツク——シーラの兄。一時期サウニケを出走し、家族に迷惑をかけた。

（注3）ヘッドネット——蚊よけのために頭にかぶるネット。

（注4）イヌピアット——アラスカの先住民族。リタ・シーラ・カナツクは、イヌピアット・エスキモー。

問 1 傍線部①の本文中における意味として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

① 釈然としない

- ア 受け容れられない
イ 同意できない
ウ 信じられない
エ 疑問が解けない
オ 気を許せない

問 2 傍線部②の本文中における意味として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

② 滔々と

- ア ゆっくりと
イ よどみなく
ウ 得意げに
エ 口ごもりながら
オ 長い時間をかけて

問3 傍線部㉔の本文中における意味として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

㉔ 涼しい顔

- ア さわやかな表情
イ つらそうな表情
ウ 冷淡な表情
エ 落ち着こうとする表情
オ 平然とした表情

問 4 傍線部①「待っていた、とばかりにリタが不敵な笑みを浮かべる。」とあるが、リタはなぜ「不敵な笑みを浮かべ」たと考えられるか。

その説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア リタの夢である「有名になって、サウニケの危機を世界に知らせる」ということと、デナリに登るという行動とのつながりを理解できないでいる緑里の様子を楽しんでいたから。

イ 北米最高峰であるデナリに登るのは困難であるとして、リタの挑戦を本気にしていない緑里に、自分の計画が誤っていないことを伝えなければならぬと意気込んでいたから。

ウ 冬のデナリに単独登頂した初の女性登山家となって有名になり、サウニケを救うという大胆なリタの計画を発表するうえで、緑里の問いは核心をつく好都合なものだったから。

エ 一流の登山家として認められることがリタの夢に向かう第一歩であるため、たとえデナリ登山をみんなに反対されても、必ずやり遂げるという意思を表明しようとしていたから。

オ 有名になるための手段をさまざま考えた結果、最も時間をかけずに実現するには、どんなに困難でもデナリに登る以外にないという悲壮な思いを抱いていたから。

問5 傍線部②「要は、ストーリーなのだ。」とあるが、どういうことか。その説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア アラスカに生まれたイヌピットであるリタが、アラスカで一番高い場所から一番海に近いサウニケの危機を伝えるという組み合わせの妙が、リタの夢を実現するためには必要であるということ。

イ 単にいま、沈みつつあるサウニケの危機を伝えるというだけでは不十分で、サウニケから人がいなくなる前に手を打たなければならないという危機感が、リタの気持ちを支えているということ。

ウ ただ単に登山家として有名になることを目指すだけではなく、デナリの初の女性冬季単独登頂に挑戦するという最も困難な事業に取り組むことが、リタの物語を盛り上げること。

エ アラスカの象徴であるデナリへの冬季単独登頂を果たせば、女性初という記録が残るだけではなく、リタの個人的な情報に対しても関心が向けられ、リタがサウニケ出身の注目の有名人になるということ。

オ アラスカの象徴であるデナリへの女性初の冬季単独登頂者が、他でもないアラスカの沈みゆく島の出身者だという注目材料が、世間に島の危機への関心を向けさせることにつながるということ。

問 6

空欄

に入る表現として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

- ア 自分にリタは止められない
- イ リタの意図が理解できた
- ウ リタもシーラも本気だった
- エ 無茶や無鉄砲ではない
- オ 疑問は氷解していた

問7 傍線部③「緑里はとつさに答えられなかった。」とあるが、なぜか。その説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア 十代の頃は自然の魅力に溢れた写真集を出すのが夢だったが、専門学校を卒業してからは仕事に追われて、個人的な作品作りに集中できる環境を得られていなかったから。

イ 写真家になるには専門学校にいる間にチャンスをつかむ必要があったが、コンテストに応募した作品が入選することもなく、自分には写真の才能がないことを痛感していたから。

ウ 緑里がなりたかったのは商業カメラマンではなく作家だったが、広告用の写真を撮り続けているうちに、いつしか撮影は飯を食う手段にすぎないと思うようになっていたから。

エ 希望をかなえ作家活動で生活していける写真家はごく少数であり、柏木のアシスタントを続けるなかで、専門学校時代の実績もない自分分は作家になれないと諦めかけていたから。

オ 柏木から声をかけられて専属アシスタントとなり、このまま柏木のもとで修業を積み、いずれ静物撮影の専門家になれるだろうという見通しが、すでに立っていたから。

問8 傍線部④「リタに何がわかるの」とあるが、この時の緑里の心情の説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア 芸術的な写真が撮りたいならやればいいという意見は正しいが、作家で食べていくことも、商業カメラマンの仕事との両立も難しいという現実を、リタはわかっていないと苛立つ心情。

イ 作家にはなれないから商業カメラマンになるしかないという言葉を傲慢だと指弾するようなリタの言葉に傷つき、自分の苦しい気持ちなど少しもわかっていないとリタを責める心情。

ウ 作家になれないと自分に言い聞かせながらも、芸術的な写真が撮りたいという封じ込めた思いをリタに指摘され、ままならない現実にもがき苦しむ憤懣かんまんをリタにぶつけ、自らをかばおうとする心情。

エ 自分の才能のなさにはる苦い思いを抱きつつ、自分は写真家ではなく商業カメラマンになると言ったものの、決して商業カメラマンを見下しているわけではないと、リタに抗議しようとする心情。

オ 作家を目指すという危険な場所に飛び込むようなことなどできない自分の弱さを指摘されたことに腹を立て、リタの言葉を否定することとで、これ以上会話を続けることを拒絶しようとする心情。

問9 傍線部⑤「……私は、私が好きだと思える写真が撮りたい」とあるが、この時の緑里の様子の説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア 絶対に写真家になると約束する自信はまだないが、「芸術的な写真が撮りたいなら、やればいい」というリタの言葉に対して、「私が好きだと思える写真が撮りたい」くらいなら返してもいいのではないかと譲歩している。

イ 生活のためには商業カメラマンの仕事を今すぐ辞めることはできないものの、プライベートの時間に趣味としての写真を撮ることで、商業の仕事との両立を実現させ、作家になる夢をかなえようと決意している。

ウ 写真家になりたいと宣言することによって、カメラを仕事にすることによってと反対していた母に再び心配をかけるようになることを案じ、作家になりたいという思いは封印しながらも、思わず本心を漏らしてしまっている。

エ 地上に存在しない美しい光景が奇跡的に出現する興奮が、自分が写真をはじめた理由だったことを思い出し、作家になりたいとまではまだ言えないが、心を動かすための写真を撮ろうという思いが芽生えている。

オ 冬のデナリ登頂に成功したリタの記念写真を、写真家になった緑里が撮るという未来を確信しているリタの言葉を聞いて、自分が好きだと思える写真を撮ることが現実味を帯び、素直に夢を口に出している。

問 10 本文の表現についての説明として適当でないものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア 波線部ⅰ「補足するようにシーラが言った。」には、シーラが冷静に会話の展開を把握し必要な情報を提供する姿がうかがえ、野望を掲げるリタを支える参謀という取り合わせに、説得力を与えている。

イ 波線部ⅱ「青臭い想いが蘇るたび、緑里は自分に言い聞かせる。」は、作家という夢が、未熟で世間知らずの考えであることを思い知らされ、商業カメラマンになることに甘んじようとする緑里の様子を表現している。

ウ 波線部ⅲ「リタは強引で、同時に優しくかった。」からは、「絶対に写真家になつて」という一見押しつけがましい言葉の裏に、緑里が心のままに生きることを願うリタの友情があることが読み取れる。

エ 波線部ⅳ「日常から断ち切られた桃源郷を夢見ている。」は、俗世間を離れた別天地を意味する桃源郷という表現を用いることで、緑里が密かに現実から逃避したいと願っていることを暗示している。

オ 波線部ⅴ「明るい夜を、涼しい風が吹き渡る。」は、思い描いていた姿とはかけ離れた現状に苦しんでいた緑里の視界が開け、自分の思いを再確認することで心が楽になっている様子を表現している。

第二問 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

「情報処理」という観点を中心としたものの見方は、「情報処理パラダイム」や「コンピューティング・パラダイム」と呼ばれている。これらは多様な分野で、しかもさまざまな文脈で用いられている言葉であり、その内実を一義的に示すのは難しい。だが人間の知能をコンピュータによる情報処理として再現しようとするAI研究は、明らかにこれを象徴する営みである。ほかに、たとえば心理学の分野では、人間の心理をコンピュータのような一種の情報処理機械として見る思考体系を「情報処理パラダイム」と呼んでいる。同様に、企業のような組織の経営を情報処理という観点で捉えるパラダイムは、経営組織論において「情報処理パラダイム」として^(注1)術語化している。

映画^(注2)『マトリックス』で示される世界観は、このパラダイムの^(注3)キウキョク形である。コンピュータによる情報処理によってつくりだされている仮想世界が、フェイクとして気づかれることなく、現実として受容されている。さらに映画の中のその仮想世界が、映画を観る我々自身の現実と変わらぬものとして描かれることで、我々自身のこの世界をも仮想世界として疑うように自然と導かれる。まるで、宇宙で生じるあらゆることは情報処理である、と宣言しているかのようなのである。(Ⅰ)

「あらゆること」とまで言わずとも、情報処理という観点では、人間の世界も機械の世界も同じに見えてくるという点が重要である。あなたがいま行っている「読書」を一種の情報処理として捉えるなら、人間は一種の情報処理機械、すなわちコンピュータのように見えてくる。ならばコンピュータも読書が可能だろう。いや、それはすでにプログラムのインストールやデータ入力という私たちの「読書」を行っているのだろうか。それなら我々も、面倒な読書などせずとも、脳に直接それをインプットできるのではないか……。 (Ⅱ)

シンギュラリティに期待する者も、キョウ^⑥イとして警告する者も、^①このようなパラダイムの中にいるという点では同じである。「人間を超えるAI」や「完全なるAI」を想定して恐れるということは、人間とAIを、全体として比較可能なものとして並置しているということである。全体として、というのは、チェスや囲碁の強さといった部分的な能力としてではなく、トータルとしての人間、あるいはその本質において——それが何であろうとも——という意味である。(Ⅲ)

天才物理学者と言われた^(註3)ホーキングでさえ、この点は同じである。むしろ彼は、人間の脳をはつきりとコンピュータと同一視していた。見た目も素材もまったく異なるものを同じであると主張できるのはなぜかと言えば、情報処理という観点が中心に据えられているからである。(Ⅳ)

ホーキングほど過激でないとしても、「情報」という言葉で真つ先に連想するものが「コンピュータ」であるならば、あなたも情報処理的な情報観の持ち主かもしれない。「(ある種の)情報はコンピュータで扱える」という漠然とした認識と、「情報はすべてコンピュータで扱える」という言明の間には、本来、大きな溝があるが、^②皮肉なことにコンピュータと違って曖昧な人間の思考は、簡単にこれを飛び越えてしまう。(Ⅴ)

我々が漠然とAIを恐れるのも、結局のところ、知らず知らずに後者のごとく捉えているからにほかならない。つまり、「情報はすべてコンピュータで扱える」と考えているからこそ、言い換えれば、コンピューティング・パラダイムにどっぷりと浸^つかっているからこそ、人間と同等か、それ以上に優れたAIの出現を恐れるのである。

したがって、ここで少し立ち止まって考えてみることもできる。もしもこのパラダイムに限界があるなら、言い換えれば、なら、人間とAIはまったく別物であるという可能性が出てくる。そうであるなら、AIをむやみに恐れる必要はない。AIは人間を補助する数ある機械の一つに過ぎず、いかにうまく使うかという問題だけが残るのかもしれない。

だが現時点ではこれは願望の一種に過ぎないから、とりあえず脇に置いておこう。

ところで、人間と機械が本質的に同じだとして、我々はそれを恐れるべきだろうか。ましてや、同じであるはずの機械と戦う必要はあるのだろうか。

『マトリックス』の主人公であるネオたちは機械との戦いに挑むが、脳にプログラムをインストールするあのシーンが象徴するように、情報処理機械という点で、実は自分たちも端から機械であるとも言える。ならばそこには機械が機械に挑むという、ただの勢力争いの構図しか存在しないことになる。機械同士の戦争があるだけである。

とはいえ、我々が恐れるのも無理はない。人間と機械の同一視には、もっと深刻な問題が潜んでいる。『マトリックス』を機械同士の戦争物語として片付けることができないほどに、これまでの人間のあり方と、その社会を脅かす問題である。

人間と機械の同一視という事態を、別の角度から眺めてみよう。

機械という概念は比較的新しい概念だが、それでも近年に至るまで、普通は人間とは異なるものとして理解されてきた。それがいま同一視されつつあるということは、機械が人間に近づいているか、人間が機械に近づいているか、少なくともそのどちらかであるということになる。

実際のところ、この二つのプロセスはともに現に進行中であると言えよう。それも机上の空論としてではなく、リアルな事態として生じつつあると認識されている。

人間に近づきつつある機械とは、もちろんAIのことである。AIとは、一言で言えば「精神化された機械」である。「AI (artificial intelligence)」という言葉は、一九五六年に開催されたいわゆる^(注4)ダートマス会議に端を発するが、それはまさにコンピュータという

機械によって精神をシミュレートする試みとして提起されたものである。「ChatGPT」や「ワトソン」といったAIは、近年におけるその到達点にはかならない。こうしたAIの開発は、機械を人間の側に引き寄せようとする試みであり、その結果として、機械が人間社会に深く入り込んでくるという事態が生じつつある。

こうした③「機械の精神化」の裏側で生じているのが、「精神の機械化」である。これは逆に、人間を機械の側に近づけようとする試みである。

精神の機械化は、現代の科学全般において行われていると言ってよい。だがその端的な例を一つ挙げるとすれば、「認知科学(cognitive science)」ということになるだろう。認知科学は、ダートマス会議をその起源とする見方があるほどAI研究とは密接な関わりをもつ。人間の認知活動を主としてコンピュータをモデルとする情報処理プロセスとして探究するという点で、ちょうど逆方向のものと考えることができる。AI研究に比べれば目立たないが、我々の人間観に直接関わる学問である。

実は、我々への影響力という点でより深刻に捉えなければならないのは、機械の精神化よりも精神の機械化である。もちろん両者は互いに強く結びついている。たとえば高度なAIが一般化することで、我々自身の自己認識も少なからず影響を受ける。だがAIに代表される機械の精神化は、少なくとも表面的には、それまで我々とは別のものであった機械という存在を我々の側に引き入れるというだけであり、我々自身の自己認識に直接関わるものではない。

それに対して精神の機械化は、我々自身が機械の一種であると認めることであり、我々の自己認識そのものの問題である。そうした我々がかたちづくっている社会に対しても、甚大な影響力をもつ。

ちよつと想像してみよう。もし我々が機械であるなら、これまで「人間ならではのもの」と信じられてきたさまざまな概念、たとえば、自律性や主体性、倫理や人権、自由、責任、法的秩序といった概念や、それらに基づく諸々の社会的制度は、崩れ去っていく可能性があ

る。我々がただの機械であり、人間の尊厳や根本的自由といったものと無関係であるならば、他者を道具として用いてもよいし、使い捨ててもよいだろう。機械なのだから、ダメになったら新しいものに取り替えればよいのである。長い歴史を経てようやく確立されてきた奴隷制の否定のような人類共通の価値観も、その土台を失うことになるかもしれない。

そうなれば、人間が機械の奴隷となることも甘んじて受け入れなければならないだろう。^④それを否定するための論拠は、精神の機械化によつてすでに失われているのである。それでも『マトリックス』のネオたちのように機械に戦いを挑むことはできる。自分たちとは異なる存在として、「機械」として相手を見定め、戦いを挑むということそれ自体には、「人間」としての矜持^{きようじ}をみることはできるかもしれない。だが彼らもまた本質的には機械であつて、人間の尊厳なるものとは無縁の存在であるならば、そこにはどこまでも矛盾した絶望的な構図しか存在しないことになる。そのとき『マトリックス』は、機械に挑む人間たちの英雄譚^{えいゆうたん}ではなく、かといって、機械同士の単なる戦争物語として片付けることもできない、精神の機械化によつてモノであることがロ^⑤デイ^⑥した人間たちが、その境遇を受け入れることができずにあがき続ける悲劇の物語として見えてきてしまう。

いずれにしても、こうした物語を支えている思考体系こそ、コンピューティング・パラダイムにはかならない。情報处理的な情報観を中心に据えることで、人間と機械の同一視は促進されていく。コンピューティング・パラダイムはそれとして気付かれぬまま、現代社会にすでにかなり浸透している。

(西田洋平『人間非機械論 サイバネティクスが開く未来』より。出題の都合上、本文中に一部変更した箇所がある)

(注1) 術語——学術語。専門用語。

(注2) 『マトリックス』——一九九九年公開のアメリカ映画。仮想世界マトリックスで生きる主人公ネオが、現実世界の救世主として、

人類をコンピュータの支配から解放する戦いに身を投じる物語。

(注3) ホーキング——一九四二〜二〇一八年。イギリスの理論物理学者。

(注4) ダートマス会議——アメリカのダートマス大学に在籍していた認知科学者であるジョン・マッカーシーが、一九五六年に主催した会議の通称。「人工知能」(Artificial Intelligence) という用語が人類史上初めて使用され、人工知能という学術研究分野を確立した。

問 11 傍線部①に相当する漢字を含むものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

① キュウキョク

- ア あの映画はフキユウの名作だ
イ 感動のあまりゴウキユウする
ウ 掃除機のキュウイン力が落ちる
エ キュウリョウ地帯に住む一族
オ 人類の起源をロンキユウする

問 12 傍線部②に相当する漢字を含むものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

② キョウイ

- ア イアツ的な態度を取る
イ ついにイギョウを成し遂げた
ウ 先人に対しイケイの念を抱く
エ ムイな日々を過ごしている
オ 老人ホームへのイモン

問 13 傍線部㉔に相当する漢字を含むものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

㉔ ロテ

- | | |
|---|--------------|
| ア | 新しい学説をテショウする |
| イ | 先着順に粗品をシンテする |
| ウ | 誤った情報をテセイする |
| エ | 文章のテサイを整える |
| オ | 寒冷前線がテタイしている |

問 14 次の一文は、本文中の（Ⅰ）～（Ⅴ）のうちのどの部分に付け加えることができるか。適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

つまり、人間とコンピュータを真に同等に捉えているということである。

- ア（Ⅰ） イ（Ⅱ） ウ（Ⅲ） エ（Ⅳ） オ（Ⅴ）

問15 傍線部①「このようなパラダイムの中にいるという点では同じである」とあるが、どのような点が「同じ」なのか。その説明として適当

なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

- ア 「情報処理パラダイム」や「コンピューティング・パラダイム」と呼ばれる、情報処理という観点を中心としたものの見方をしている点。
- イ コンピューティング・パラダイムにとらわれるあまりに、「人間を超えるAI」や「完全なるAI」の出現を想定して恐れている点。
- ウ 人間の知能・精神の活動や社会の営みを情報処理という観点で捉え、人間をコンピュータと同様の一種の機械と見なしている点。
- エ 「読書」を一種の情報処理と考え、人間もコンピュータのように本の内容を直接脳にインプットできるのではないかと期待している点。
- オ コンピュータがあらゆることを情報処理によって解決し、我々自身の現実世界と変わらない仮想世界をもつくりだせると考えている点。

問 16 傍線部②「皮肉なことにコンピュータと違って曖昧な人間の思考は、簡単にこれを飛び越えてしまう」とあるが、筆者はなぜ「皮肉なこ

と」だと言うのか。その説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア コンピュータと異なり人間の思考では、「(ある種の)情報はコンピュータで扱える」という認識と、「情報はすべてコンピュータで扱える」という言明との違いを厳密に区別しないから。

イ 「情報」という言葉で「コンピュータ」を連想するのは、人間の思考をコンピュータと同一視するホーキングと同じだが、それは情報処理的な情報観に基づいていると言えるから。

ウ 情報処理という観点で、人間とAIを比較可能なものとしているが、そのことにかえって人間の思考とコンピュータの情報処理能力の差異が強調されてしまうことになるから。

エ 情報処理について、「情報」を機械的に処理できるものと考え、人間が問題にする情報の「意味」を看過したままで、人間の思考とコンピュータを同じであると主張しているから。

オ 情報処理的な情報観は人間の思考をコンピュータと同一視するものでありながら、その情報観には、コンピュータとは異なる柔軟さと不正確さを伴う人間の思考の特徴が見てとれるから。

問 17

空欄

に入る表現として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

- ア 人間とコンピュータを同等に扱ってはならない
- イ 情報処理的な「情報」が情報の本質でない
- ウ 人間の知能を情報処理として再現する
- エ 人間とAIは本質的に同じではない
- オ 人間以上に優れたAIは出現しない

問 18 傍線部③『機械の精神化』の裏側で生じているのが、『精神の機械化』である」とあるが、どういうことか。その説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア 「ChatGPT」や「ワトソン」といったAIの開発の結果として、機械が人間社会に深く入り込むという事態が生じ、人間が機械に依存するようになったということ。

イ 人間と機械の同一視により、機械が人間に近づいていくプロセスと人間が機械に近づいていくプロセスという相反する二つのプロセスがせめぎ合っているということ。

ウ 高度なAIが一般化して、機械という存在を人間の側に引き入れ人間社会での市民権を与えることは、人間自身が機械の一種であると認めることにつながるということ。

エ AIを人間に近づけようとする試みが進み、機械が人間社会に深く入り込むと同時に、人間を機械の一種として認め、機械に近づけようとする試みが進んでいるということ。

オ コンピュータによって精神をシミュレートする試みが提起される一方で、自由であるべき人間の精神が機械的に一定の枠にはめられ、人間らしさが失われつつあるということ。

問 19 傍線部④「それを否定するための論拠は、精神の機械化によつてすでに失われている」とあるが、筆者はなぜそのように言うのか。そ

の説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア 奴隷制の否定は、長い歴史を経てようやく確立されてきた人類共通の価値観だが、精神の機械化によつて人間と機械との区別がなくなれば、その価値観に基づいた社会的制度が崩れ去っていく可能性があるから。

イ 精神の機械化とは人間が機械の一種であると認めることであり、機械の一種なら、機械による人間の支配を否定する根拠である、人間ならではの尊厳や根本的自由とは無縁の存在ということになるから。

ウ 人間の本質と機械の本質を同じものと考えるならば、人間は「機械」を自分たちとは異なる存在と見なしたり、「人間」として機械に戦いを挑んだりする意味も必要性もなくなるから。

エ 人間がモノにすぎないというのであれば、たとえば個々人が「人間」としての矜持を持っていたとしても、「機械」の頂点としてのコンピューターの支配からは逃れることができないから。

オ コンピューティング・パラダイムの思考体系に則^{のっと}って人間が機械の一種であるとするなら、機械が同等の存在である人間を奴隷として支配することに何の矛盾も生じないから。

問20 本文の内容に合致しないものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア 『マトリックス』の登場人物は、脳にプログラムをインストールされている時点で情報処理機械に過ぎないという点のみに着目すると、機械に挑む人間たちの英雄譚というより、機械同士の勢力争いであると言える。

イ 「完全なるAI」とは、チェスや囲碁の強さといった部分的な能力に特化したAIではなく、人間よりも優れた情報処理能力を有し、トータルとしての人間の知能や心理を再現したAIのことである。

ウ AI研究も、心理学や経営組織論における「情報処理パラダイム」と呼ばれる思考体系も、人間の精神をコンピュータのような一種の情報処理機械として見ているという点で共通のパラダイムの中にある。

エ 人間の知能が扱う情報は、コンピュータが扱う情報と同様に機械的に処理できると考えるのがコンピューティング・パラダイムであり、こうした情報処理的な情報観が現代社会に深く浸透している。

オ AIの開発は、それまで我々とは別のものであった機械を人間の側に引き寄せただけで、人間側の自己認識を大きく変えることはなかったが、人間と機械の同一視は、人間の自己認識に関わる問題である。

第三問 次の設問に答えなさい。

問 21 次の文の傍線部の四字熟語の正しい意味はどれか、ア～オの中から選んで答えなさい。

たしかに彼は博覧強記だが、自分の意見をあまり主張しないことが残念だ。

- ア 多くの資料から根拠を集めて引用し、確実な証拠を示すこと。
- イ 定見がなく、他人の意見や行動に軽率に同調すること。
- ウ 広く書物を読み、記憶力に優れ、知識が豊富であること。
- エ 意志が強く、心に思い定めたことを守って変わらないこと。
- オ さまざまな学問に通じ、多くの分野で才能を有していること。

問 22 次の文の傍線部の故事成語の正しい意味はどれか、ア～オの中から選んで答えなさい。

満を持して発売した新商品が市場を席巻^{せっけん}した。

ア 大いに流行し、社会現象となること。

イ 高い評価を得て、脚光を浴びること。

ウ 世間に知れ渡り、評判になること。

エ 圧倒的な勢いで勢力範囲を広げること。

オ 競争に打ち勝ち占有率が高くなること。

問 23 次の文の空欄に当てはまる語を、ア～オの中から選んで答えなさい。

製品やサービスを利用する際、特定の利用者がストレスなく意図した成果を得られるように、有効であるか、効率的であるか、満足できるか、などの観点から、を追求すべきである。

ア クライアントソフト

イ インタラクション

ウ ユーザビリティ

エ インターフェース

オ ユニバーサルデザイン

問 24 次の文の空欄に当てはまる語を、ア～オの中から選んで答えなさい。

顧客や社会のニーズに応え、市場における優位性を獲得するために、デジタル技術を活用し、業務フローの改善やビジネスモデルの
変革を目指して に取り組む企業が増えている。

ア IT化

イ デジタルトランスフォーメーション

ウ コミットメント

エ デジタルイノベーション

オ コンフィギュレーション

問25 次の文の傍線部の語句の正しい意味はどれか、ア～オの中から選んで答えなさい。

ワーケーションの概念は二〇〇〇年代にアメリカで誕生したが、「働き方改革」が推進され、コロナ禍でリモートワークやテレワークが一般化してきたことにより、日本でも導入が進み始めた。

ア インターネットの普及により、オフィス以外の場所でも仕事ができる環境が整ったこと。

イ 福利厚生の一環として、有給休暇を取ってリゾート地や観光地に長期滞在すること。

ウ 出張先などで滞在期間を延長し、その地域の関係者との交流を深めること。

エ 観光の活性化や移住者誘致を目指す自治体が、サテライトオフィスを用意すること。

オ オフィスとは異なるリゾート地などで、余暇を楽しみながら仕事を行うこと。

